

ラウンドテーブル①

「絵本でつながるケアとインクルージョン」

執筆者：原島恵

掲載誌：絵本学会 NEWS (82)

コーディネーター：原島恵（ちひろ美術館）

コメンテーター：水島尚喜（聖心女子大学）

ゲスト：村中李衣（児童文学作家、絵本作家）

はじめに

今回の絵本学会大会のテーマは「絵本の窓から世界を見る」である。本ラウンドテーブルでは、ひとつの芸術として成熟してきた絵本を、さまざまな人たちとの関わりのなかから見つめ直し、絵本が本来備えている力や特質と、その新たな可能性をさぐる機会とした。そこで、現在、各分野で注目されている「ケアとインクルージョン」をテーマに据えて考えることにした。「ケア」は、心と体をケアすることや、生活の質の向上、そして社会参加への支援なども意味する。「インクルージョン」は、「社会包摂」とも称されるが、性別、年齢、国籍、障がいの有無など、あらゆる特性に関わらず、誰もが自分らしく生きる環境を整え、尊重しあうことを意味する。このテーマに則して、原島は、この20年をふりかえって絵本が求められてきた状況や社会的な役割を概観し、水島は、かがくいひろしの制作からケアとインクルージョンの背景にあるものを探り、村中は、自身が実践している絵本の読みあいやワークの事例を紹介し、ラウンドテーブルを展開した。

この20年をふりかえって

2001年に「子どもの読書活動の推進に関する法律」が施行されたことを受けて、各方面から絵本の読み聞かせや、ファーストブックを手渡す活動などが広がった。就学前の乳幼児だけではなく、小学校高学年や中学生なども対象に盛んに読み聞かせが行われ、幅広く絵本が読まれるようになった。

この20年ほどを振り返ったときに、日本の絵本において、東日本大震災の発生は、大変大きなできごととして記憶されている。絵本や子どもの本に関わる人たちによる直接的な支援のほか、震災や原発をテーマにした絵本もつくられた。被災した人たちの心のケアにも大きな関心が寄せられた。震災、そして、コロナ禍で絵本が求められたことは、売上からも見て取ることができる。長らく出版不況といわれるなかで、絵本は堅調に売上を伸ばしている。命や、人とのつながり、自然のありかたなどの普遍的なテーマの絵本が求められた。危機的な時代のなかで、読み手側がその意義を敏感に感じ取り、共感が得られたのではないか。

絵本の売上が伸びている理由として、絵本のテーマの多様化とともに読者層が広がったことも挙げられる。2010年代以降は、国内で多様な人々が社会の一員として、差別や偏見なく、平等に機会を享受できる社会を築くための法整備が進み、文化芸術活動に関連する法案も成立した。こうした背景のなか、セクシュアル・マイノリティや、見えにくい困難を抱える人たちなど、多様性を受け入れるテーマの絵本が相次いで出版されるようになった。欧米でも、難民など社会から排除された人たちや、社会的な困難を抱える人やジェンダーなどをテーマにした絵本が数多く出版され、日本でも翻訳出版され、近年、その数は増えている。また、2022年のロシアによるウクライナ侵攻、そして翌年にはパレスチナとガザの戦争がはじまり、現在も終わりが見えない中で、戦争や平和をテーマにした絵本が国内外でこれまでになく出版されている。震災やコロナ、そして戦争など社会をゆるがす大きなできごとが起こり、読み手の感受性も研ぎ澄まされ、読み手の奥底にある感情を喚起する絵本が求められているのではないか。

ケアとインクルージョンの背景にあるもの—かがくいひろしの制作から

まずテーマであるケアが行われる関係性に注目したい。キュア（Cure）は治療を行うことで、上から下へという関係がつくられる傾向が強いが、ケア（Care）は対等な関係性を築くところから始まる。かがくいひろし（1955～2009）は、まさにケアの姿勢で教育や絵本づくりに取り組み、インクルージョンを体現した作家である。『だるまさんが』（ブロンズ新社）は2008年に刊行されて以来、ファーストブックとして絶大な人気を博している。そこからは、彼が向かい合い、受け止めた子どもの身体感覚が伝わってくる。

かがくいは、早逝した障がいのある姉と姉を支えた家族の存在を起点として、人が生きていくうえで大切なことについて常に思考し、実践をしていた。学生時代は彫刻制作に組み入り、その経験は命の手触りをとらえることにつながっている。また、当時、社会的なメッセージ性を持つ絵本が台頭するなか、『はせがわくんきらいや』（長谷川集平作・絵、すばる書房、1976年）に感動していた。それは、彼が絵本を表現のひとつとして認識するきっかけにもなった。大学卒業後は、約30年にわたり特別支援教育に組み入り、重度の障がいのある子どもたちと独自の芸術／教育活動を続けてきた。四肢が不自由で発語が難しい子どもに向き合い、その呼吸に合わせて、ともに音を奏で、絵筆を動かした。かがくいは、子どもとフラットな関係性を結び、ことばではなく、呼吸や触覚を通して、子どもの命に向き合っていた。

教育の現場以外でも、人形劇の活動や造形作品の展示などを行っていたが、彼が絵本制作に組み入り始めたのは、40代に入ってからである。2005年に絵本作家としてデビューしてから、2009年に54歳で亡くなるまでのあいだに14冊、没後に2冊、合計16冊の絵本が刊行されている。デビュー前に制作していた絵本『うめじいのたんじょうび』（講談社、2016年）は、つけものたちが梅干しのおじいさんの誕生日を祝う物語。うめじいが語るうめことばは、理解ができないけれど、みんなでうめじいを囲み、彼が生きてきた道を想い、祝う。まさに特性の違いを超えて共感しあうインクルーシブな世界が描かれている。かがくいの絵本の根底に一貫してある「愛ある知性と感性」は、今の時代にまさに求められているものであり、子どもたちは直観的にそれを感じ取っているのであろう。

絵本に抱かれるような環境を

山口県山陽小野田市の小野田めぐみ幼稚園は、療育も含め様々な環境にある子どもたちが通園している。その中で、保護者や地域の方とともに、絵本を大切に活動を重ねてきた。たとえば、保護者が中心となり、表紙を見せて絵本を展示できる面展台を手づくりし、子どもたちが「ものがたり」の世界に身体ごと入りこめるような絵本の迷路が園内に設置されている。まずはこの園で村中が2年間継続して行ってきた子どもたちとの絵本の読みあいやワークから気づいたことを報告する。

年中のクラスで読みあった『エンとケラとプン』（いわむらかずお作・絵、あかね書房、1982年）は、心を表す丸い吹き出しのなかに、悲しみを表す「エン」、嬉しさを表す「ケラ」、怒りを表す「プン」があり、そのどれかひとつが大きくなったときでも、そのほかのふたつの気持ちが完全に消えてなくなるわけではないことが描かれている。読み終わった後、男児Tくんが、「自分の心のなかのエンもケラもプンも大きすぎて、丸のなかにおさまりきらなくて、苦しい。だから自分は大きくななくちゃだめなんだ」と訴えてきた。周りの大人は、日ごろから彼の行動を問題視していたが、その苦しさに気づいていただろうか。この絵本が彼の心を認めるようにそこにあったから、彼は自身の苦しさを語る事ができたのだろう。

在園児のなかには、経済的困窮など家庭の問題を抱えている子どもたちもいる。夜のうちにこっそりアパートから家族全員で姿を消した女兒のもとへ、居場所を突き止め届ける園からの支援物資の中に、村中は1冊の絵本『ぼくはせかいいちしあわせなねこ』（つがねちかこ作、赤ちゃんとママ社、2024年）を忍ばせた。雑然とした居室のなかで、女兒とその姉は、歓声をあげて、絵本を手にとると、うっとり表紙を見つめた。絵本の表紙から光が放たれ、「おいで、いいよ、ここにいて」と誘うのを目の当たりにした。それは、理屈抜きで子どもたちが絵本を受け止めた瞬間であり、さながら宮沢賢治作品に出てくる「とうめいなたべもの」のようだった。

また、村中は、16年ほど前から、希望する女性受刑者にわが子を想って1冊の絵本を選び声に出して読んでもらい、録音して子どもに届ける活動を行っている。カナダのトロントでも同様のプログラムが実践されていることを知り、昨年見学するチャンスを得た。読字に困難のある女性が、支援者の補助を受けながら『かいじゅうたちのいるところ』（モーリス・センダック作、じんぐうてるお訳、富山房、1975年）を読んだ。主人公がかいじゅうたちの王様になって行進する場面が3見開きあるが、ここには文字がない。それまでたどたどしく読み進めていた女性は、この場面にくると、ひとつ大きく息を吸った後、ジャングルのなかに風が吹きわたるような深い声を出した。まさしく、生きているという「息」が、3場面に行きわたり世界を満たした。この女性が悲しみのなかで生きているということ、その声をわが子に伝えたいという想いが伝わってきた。彼女がこの「ものがたり」を生きることで生まれた声だった。とかく型にはまったことばで導こうとする支援とは何かということに思い至るできごとのひとつでもあった。

新しい「ワークブック」づくりについて

現在、村中は、小川すはる、こしだミカ、近藤薫美子、さげさかのりこ、佐藤真紀子しらとあきこ、という6名の画家の力を借りて、ともに新しいワークブックづくりに取り組んでいる。ケアするものとケアされるものが同じ地平で物語の世界を生きて、わたしがわたしであることを認めあっていくワークを提案しようとしているのだ。そのワーク実践の一端を紹介する。

小野田めぐみ幼稚園で、『アリのさんぽ』（こしだミカ作・絵、架空社、2005年）を読みあった後、こしだの絵をもとにした亀のコウラを描くワークを行った。自分が亀になり、大きくなったとき、どんな姿になるかを描くワークである。さきほど紹介したTくんは、卵を守るオスの亀のコウラを丁寧に描いた後、自身のことを語り始めた。「みんなは明るいときには、暗いところへ隠れるけれど、それはダメ。明るいときは、明るいところに隠れなければダメなんだ」と言う。「だから、ぼくは大きい声で歌を歌って、踊りまわって、隠れているんだ」と。Tくんの日常の目立つふるまいは、心のなかの重く暗いものを必死で隠すためのものだと気づかされた。Tくんは、絵本から「ものがたり」の世界を本気で生きることを学び、ワークを通して心がほぐれたところで、自分を語ることばが出てきたのだろう。

そのほか、養護施設の子どもたちとワークを行うなかで、村中自身がケアされた体験も語られた。こうした実践の場を考察の窓として、決して括ることのできないひとりずつの痛みや傷つきに「ものがたり」がどうかかわっているのかを、具体的に紹介した。そして、そこから、「ものがたり」を介して人と人が結び合う瞬間は、支援者によって明快に予想出来るものでもないし、それを求める方法論の提示はむしろ危険であることが強調された。そのうえで、当事者と傍らにいるものが対等な地平にあって、それぞれの人生に立ちあうこれまでとは異なる試みが、これからの新しいケアの可能性をみせてくれていることも希望を持って語られた。

（文責：原島恵）